

豊川村適産調旧蹟考

石川理紀之助著

豊川村旧蹟考

旧跡考は村落毎に古代の変動に寄り紀号岩石
土壌其他地名の起源、神社仏閣の由緒等伝説口碑
を始め地景名称によりて考ふる処を将来参考の
為に記す。併せて村事上の雑事をも加ふ。

目録

地勢岩石土壌 1

上虻川 1

浦田 島の腰 古館 十王堂沢 寺屋布 稽古
沢 寺台 ケンソウ館 シヤウフ沢 鎗見沢
鳥海房 入定塚 上虻川名称 千海房

舟橋 2

船橋名称 古館 稽古沢 岡井戸名称 新屋敷
角町の古屋布 手の上

岡井戸 3

岡井戸の名称 産土神八幡宮 瀬下氏の系図

瀧の沢 石英粗面岩

槻木 4

槻木の名称 槻館 大坂森 古墳 土瀝青 塔
田の堀跡 某年の大洪水 真形草生土 馬頭観音

龍毛 5

龍毛の名称 極楽館 尼沢 護摩沢 観音村
毘沙門堂 細田の岳 坂の下 古屋布 堤下の
角閃安山岩 沖村 旧家重助 冷泉 土瀝青

山田 6

古館 屋布館 御園 古井戸 焼米 中丸 大
手の口 墓地再点 旧家の六氏
八幡館 畳石 寺屋布 古木 岩石 石器類 市
ノ坪 法流沢 湯の沢 満中 大学屋布 山田葬
具

地勢岩石土質

山は第三紀にして東部の山の麓にあり。第四紀古層の地処々にあり。新層は上虻川山より破壊して舟橋、岡井戸、槻木、龍毛に至り、山田の出水合して潟に注げり。金足の出水は大久保村元木の山崎より堺して共に潟に注げり。岩石は多く石英粗面岩にして上虻川山よりつづき岡井戸瀧の沢に石実あり。土台石又は石碑等に用ゆ、彫する文字容易く減滅せず。山田に至れば頁岩多し、砂岩、聚塊岩まれに見ゆ。槻木、龍毛には土瀝青多し、一山悉く産す。土質は埴土最も多し、腐埴土是に次ぐ、壤土砂土最も少し。

上虻川

浦田 島の腰

第三紀中化石多し。すべて海面の押し上げられたる地にして、浦田、嶋の腰等の名称を始め其認とすべきもの化石処々より産す。

古館 十王堂沢 寺屋布 稽古沢

今の字清水にあり。古館跡は南方の山にあり、東方には寺屋布の跡あり、西部には十王堂沢あり、中央の谷田に稽古沢の名称あり。すべて此近傍屋布ありとい

へども、住居せし人の名知るによしなし。

寺台

字十九番古井内にあり。山上に薬師堂あり、其下段に寺屋敷の跡あり、之を寺台といふ。何寺といふ事を知らず。

文覚台 文覚行人塚

新処北の山の上にあり。文覚といふ行人の生ながら入定したる塚也。三十年里人狸を堀る為に堀たりしに左の品物を得たり。其塚の上に松あり。行人入定の時錠の音なくなりし時堀みよといたしよし。塚の上に松を植たるを、今八尺斗の廻りのよし。年代詳かならされども、松を以てするにも二百年前後なるべし。此あと千海房なりといひつたふ。

ゲンソウ館の跡 菖蒲沢 鍵見沢

二十番字大工沢にあり。西方の山にあり、菖蒲沢は勝負沢か、鍵見沢等皆古館に縁あり。又此沢は大工の住たりとの口碑より名とす。今も大工屋敷の跡あり。

鳥海房

中田市治と云人にて今の甚太其跡也。

千海房

山根にあり。今は佐々木仁左エ門の屋敷也。

入定塚

南都家系図

上虻川名称

下虻川に対するの称なれば、此一沢はもと単に虻川といへる処なるべし。古き野帳にも虻川の沢某村とあれば、後分村して上虻川、下虻川とわかれ、其間に舟橋、岡井戸、槻木、龍毛、山田等の村居をなせしならん。

舟橋

舟橋の名称

舟橋は村の東南に方りて、古館のあとあり。此館に通ふ舟橋ありし処にや、又は洪水等の時舟橋を渡したるにや。いづれ古館にわたるの舟橋也。今の舟橋の家居と岡井戸の山根までの間の田面は家居ありし処ならん、中丸等の名残れり。今舟橋より槻木に通ふ川沿

の道は新道なるべし。槻木南部の山根を通りしならん。

古館

南部の山嶺にあり。其麓に稽古沢あり、住人の名しれず。

岡井戸の名称 阿弥陀堂

岡井戸村の本村は今の老潟にして、今の川を南部の上段古地の間に古川ありて槻木に通せし跡あり。其間に溜ありしを老潟と名付しならん。其陸に井戸ありしを村の名とせしならん。其井戸今の苗代田の内畦間にあり、字深持の畦間に残れり。又古く井戸頭等の字あり、明治九年地租改正の時舟橋に組込たり（深持に）。山林にある阿弥陀堂も、素と岡井戸の古産土神社といひ伝へり。今の岡井戸は却て後に開けし処なり。

新屋敷

上虻川新屋敷につづく。元と同村たりし時一の地也。則古館のありしところに対して後ひらきを新屋敷といひ、又後に廃家せしならん。

角町の古屋敷

今の字鈴木といふ処の西端に村役場あり、道路をへだてて舟橋字深持にて角町といふ。古き字はこれは山の崎にありて角なれる名称ならん、中丸等ありし時の名残りか。此角町に本郡金足村小泉の豪農奈良氏の祖先舟橋の奈良家より分れて住居せし処なり。幾程もなくして小泉に移住せしといふ（二百年以前の事なるべし。舟橋、小泉ともに紋処菩提所皆同じ）。

手の上

古川敷の辺にあり。これは川土手の上というの略言ならん。地景よく方れり。

岡井戸

岡井戸の名称

このこと舟橋の部に委しく記す。

産土神八幡宮 瀬下氏系図

岡井戸の本村は飛地にて、組込たる舟橋字深持にあり。今の岡井戸は瀬下正兵エの先代開墾せしといふ。同氏の元と氏神也。今神像は左襟にして、古代の形なりしを焼亡せしより新に作れるも左襟にせしといふ。瀬下氏に系図の端の如きものあり、左の如し。口碑に此八幡神体は新庄の落城の時岡井戸に移したりとい

ふ。此新庄の館といふには何村の館をいふにや可尋。

右下国殿親愛様之身内

氏者源名字瀬下安芸守

蔵信判

一字之事

同瀬下 甚三郎 元信判

同瀬下 金四郎 重信判

同瀬下 拾兵衛 勝信判

吉日良辰

于時慶長三年

霜月吉日

渡置所岡井戸之内也

瀧沢 石英粗面岩

和田と苗代沢との間の山にして岩石多し。石英粗面岩にして石材にもなり、彫刻したる文字も容易に滅せざる也。又石英の砂岩の風化したる物処々にあり。

丸の内

字中丸にあり、田中に丸の内といふ小字あり。此丸の内のあたりに堀あとあり、舟橋館の丸の内なるべし。

槻木

槻木の名称

今の字槻の木といへる処に大樹の槻ありしよし。これより名付しならん。

槐館

本部洛の西方にして高野字の山嶺にあり。住人の名知れず、唯馬場目玄蕃に落されたりと口碑に伝ふ。

大坂森

蘭土下より岩瀬に越る山道にあり、森七ツありしと也。今も処々に森あり、古墳なるにや。其近くにも墳墓と覺しき処あり、戦死せし人等の墳にや。蘭土下此麓にあり。むかしの墓地をラントウと伝ふ、今も墓地をラントウと唱ふ。此を以て考ふれば古墳ならんか。

土瀝青 油煙

俗に草生土、土油と唱ふ本邦有名の地也。此蘭土下の辺より草生土、真形、龍毛、岩瀬等につづく地脈、壺里四方位の処一山皆土瀝青生ず。これを販売して生活なすもの数十戸あり。多く柿屋根に塗り又は蔵塀板に塗り、塀に切りて道路に布き、油は土油を製す殺

塔田の堀跡

虫にも用ゆ。黒沢氏（二戸あり）焚て油煙を製し業とす。此土中より榎の木又は実杉等の埋木生ず。其中に藍鉄鉾交りて出ることあり、藍鉄鉾は蘭土下より出づ。

某年の大洪水

むかし大洪水あり。新庄横長根の肩より水越て此沢に流れたる時、蘭土下かくれたりといひ伝へり。何の頃ともさだかならねど、白鬚水のことならんか。

真形 草生土

本村の南部にして岩瀬村大堤の上にあり。土瀝青最も多し。

馬頭観音

字草生土の深田にあり。齊藤吉郎兵エの氏神にして参詣人の多き堂也。

龍毛

龍毛の名称

素と大洪水の時に作毛の流失したる地の跡に村居を開きたるを以て流毛と名付たるを、文字の不祥なるを忌て竜毛とあらためたるなるべし。往古大洪水にて槻木の蘭土下までかくれたるなどいふ頃にや。是は予が地景よりの愚考なるのみ。

極楽館 尼沢 護摩沢

山田の深田沢との境にして、東の方の山嶺尼沢の上にある。是は山田の館主山田喜六の菩提所極楽寺の跡也と古書にあり。遠く山海を見渡されて佳景の地也、故に名付くといふ。

此西の沢に尼沢、護摩沢等あり。ふるき唄に

姉こ何ちや行く山田の寺さ

年も行かないして後世願う

産土神観音

豊川に沿て観音村といふあり。素と此処の旧家沢井三左エ門の氏神にして、今も旧地に石祠あり。これを今の山根の山に移して産土神とす、故に観音村の名残れり。

毘沙門堂

下村にあり古社也。素の産土神也という。此地は龍毛開村の前よりの社ならんか。此毘沙門は素と大社にして其社地山田につづき、山田深田の下までつづきたる地ならんか。今も山田に毘沙門の字あり、大洪水に其中央破れて川を隔て両村に残りしならん。

細田の岳 坂の下 古屋布

字細田といふは田屋縄手の東部にあり。此中央に一の岳ありしならん。傍の腐植土の地の客土となして今は平地となれり、故に坂の下等の名あり。其近きに古屋布等の名も残れり。

堤下の角閃安山岩

字後に山よりつづき堤下に至り角閃安山岩顕出せり。

沖村 旧家

もと海面なりし時の名残りしならん。此沖村に沢井重助といふもと豪族のあとあり。

冷泉

十九番字郷界沼地の下に湧出す。三十一年より浴室

を設く、其功能左の如し。

古村絵図

土瀝青

堤の上の山に多し、槻木山に接す。土油を販売するも数十戸、油煙を製する黒沢氏一戸あり。

山田

古館 屋布館 御園 中丸 大手の口 古井戸

焼米 墓地再点 旧家

山田の東方の山嶺にあり、字坂の下の上の山にあり、其城跡顕然たり。坂の下の西手に大手の口あり門の跡あり、今大手の囲といふ是也。館の中段に倉庫ありしと見えて焼米多し。下りて段あり、ここに古井戸あり近年まで雨乞に汲替へ、此傍に黒川の者来り晩樂を行ふ。古井戸に武具ありといひ伝ふ。今の字家の上の内児玉問市屋敷をおそのふといふ。むかし園地なりしといふ。屋布の下に中丸といふ処あり、これはもとの中丸のあとなりしといふ。

又、大堤の西南にあたりて柄木沢は屋布館といふ台地あり、これは館なりしとなん。館主山田喜六は秋田氏の家士也（山田喜六氏は三浦兵庫守の姉婿也とな

り）。天正年中三浦氏に主家の為に議する事ありて出たる跡に秋田家の討手の為に落城、火の手を見て今の小今戸の地にありて自害せり。後家臣山田にありて主人の靈魂を祭り、年々七月十三日に自害の地に墓参して後各家の祖霊を祭るを例とせしこと百年前まで怠らざりしを、其后自害の地さへ定かならざりしを、今三十一年適産調に審査して同年より墓参を再興せり。其臣下六家、石川、金子、大木、石井、児玉、伊東等也。

八幡館 疊石

字疊沢の東峯にあり。山田喜六の鎮守にして八幡の宮ありしを、後今の八幡宮林に移せり。八幡の宮の疊を投げたるが石になりたりといひつたふ。聚塊岩あり。

寺屋敷

八幡下の山の麓にあり。寺号しれず。

毘沙門

字毘沙門は龍毛の毘沙門につづきたる地なるべし。今も龍毛に毘沙門の宮あり。

古木 石川の楸 石川の寒椿 児玉長之助の梅

石川老之助の庭前の椿は、むかし下虻川に佐竹公の御休所ありし時献納したるを大樹の為に御預けとなりし木也（此書付草木谷の焼亡に罹れり）。楸は石川老之助の庭崎の山根にある古樹也、回り一丈五六尺。児玉長之助の梅は、天保大飢饉に長之助一人生残り此梅の実を食して逃れたり。

岩石

第三紀頁岩多し。岡井戸の滝の沢より山脈つゞきたるにや。坂の下に石英粗面岩の凝灰岩呈せり。豊沢には聚塊岩あり、大坂には石英粗面岩の第四紀古層の被れる層あり。法流沢の入口に風化して脆き粗面岩の砂岩あり。

古石器類

本部落中宇西野の古層に最も多し、其図

曲玉の類 穴明岩 木葉石

黒曜石の矢の根石 雷棒の欠け

（西野の西に虻川金の崎堤あり。其の溜の中にさし出たる崎あり、これに石器あり。これは素と同村山崎と同じ古層の地なるを、堤を築きて此崎中島の如くにな

りしならんか。）

次に花畠其他処々に散在せり。

市の坪 法流沢 湯ノ沢 満中

古館のありし時は此沢合を通りし処ならん。法流沢は保量神社のありし処ならん、樹木にも保龍といふ字あり。湯の沢は湯の湧出たる地ならん、変動によりて廢れたるか。今此方位にして金山の産土神社の前の田に湯の出る処あり。満中沢は前沢の訛りたるなるべし、古館の前にあたれば也。

大学屋敷

毘沙門根笹山の東にあり。山田、龍毛の開田の時に石川大学が住居せし屋布也（大久保の古野帳にも大学の所地あり）。花畑の奥石井喜市の屋布も、素肝煎除き屋布にして大学屋布也。大学は石川老之助の中祖にして正保年間の人也。

山田の葬具

古来より葬具の龍頭を用ひず。伝曰、天王の牛頭天王の宮に手な槌足な槌の古事に準ひ、三倉鼻の夫権現、芦崎の姥堺前を比して、山田の大蛇を此村にたとへ、

下虬川に八ツ口橋の名残を留めたるより、龍の形あるものを村に入れずといふ。

下台

下台は山田部落の字家の上の西部の山の平にある平坦の地也。此の地景を察するに、石川九十郎の家は其沢口にありて、これより登りし坂路にして奥に突当たり西に屈曲して上に登れば下台の平坦の地に入る。又突当らぬ内に東に曲つて数段ある処に登る。則予が可祝を立てたる、俗に云桐木畑に至る。数段あり左右段ありて普通の山畑とは見えぬ処也。如何、古城の砦などを置たる処ならんと思ふ也。

今の九十郎より四代前の石川九十郎は予が家の分家なりし也。其人の子を長四郎といふ。此の人の嚟を今の九十郎承りしに、九十郎の蔵の後（家より南の出口の西南の懷也）より登る小道ありしよし。これは今古木の松ある処に（今九十郎の古墳の地）登る道にて、此の台の内に古く建物ありしよしをいわれしよし。砦の残れるもの何ぞありしならんか。猶中丸といふ字、此処より南にさして壺丁も隔てぬ田の内にあり。又極楽館は山田氏の菩提寺とあれば、此辺に館山の前の古城ありしにや。いづれ城郭の名残るべし。或は此下台

古き城郭にして、後館山に城を移して武士の屋布としたりを以て屋布下の字今に残るか。此屋布下の字も三百年前よりの唱也。